

臨遺跡集落・サッカラ村の生活と空間構造（その5） —サッカラ村居住者の遺跡や村への認識の実態—

岡 絵理子 *

Life and Spatial Structure in Saqqara Village,
a Settlement Adjacent to an Archeological Site (Vol. 5):
How the Residents of Saqqara Perceive Ruins and their Village

Eriko OKA*

[Abstract]

The agricultural village of Saqqara is located not far from the ancient burial ground of Saqqara, 17 km southward of the Egyptian capital Cairo. In the recent years, the wealth of Saqqara has increased since villagers have been hired to achieve tasks such as cleaning of sightseeing facilities, or burial ground excavation manual works. In spite of the village proximity to the burial ground of Saqqara which is a world-class tourism resource, the desertification of these old urban areas is going on due to the lack of basic urban infrastructures, e.g. road; and water/sewage system. A series of studies hitherto conducted by us have clarified the spatial and landscape structure of the hamlet in order to explore the future tourism potential of the Saqqara village. In this study, we have carried out a questionnaire survey with Saqqara village residents and asked them about their thinking in regard to the future tourism development of the Saqqara village. Our findings have revealed that while a majority of surveyed people are in favor of the village's development as a Cairo commuting suburb, they were very few who positively assessed the beauty of the agricultural scenery surrounding the village and the Saqqara landscape. Villagers considered not only ruins in Saqqara but those in Egypt as sightseeing spots that foreign tourists visit. Hence, those sites are perceived as workplaces but not as anything that villagers actively get involved in. It is necessary to make the villagers realize the attractiveness of the Saqqara village the same way as the foreigners or people outside the village do. We believe that this is what will create job opportunities and help the village to develop.

1 研究の概要

エジプトの首都カイロから南に 17km の地に、階段状ピラミッド等を含むエジプトの最も重要な遺跡群、サッカラ遺跡がある。この遺跡に隣接する村、サッカラ村において 4 年間調査を行ってきた。この村は、サッカラ遺跡が作られた 4000 年前から存続する集落といわれている。2011 年、1981 年以來 30 年間続いている。

* 関西大学環境都市工学部 (Faculty of Environmental and Urban Engineering, Kansai University, Japan)

た第4代大統領ホスニー・ムバーラクによる独裁体制が崩れ、選挙によりイスラム主義系のムハンマド・ムルシーが大統領となったが、この政治体制は2013年7月3日、軍事クーデターにより終焉を迎え、2014年5月に行われた選挙では、アブドルファッターフ・アッ=シーシー氏が当選、6月に第6代大統領に就任した。しかし、治安状況は改善せず、カイロではテロや爆弾事件が発生している。このような中、村の様子はあまり変わらないようにも見えるが、観光客の減少もあり、小さな店舗が増える等、小さな変化が生じている。

これまでの研究では、大きく3つの課題に取り組んできた。第1の課題は、「サッカラ村の地形的特徴と市街化の状況」を捉えた上で、その空間構造を明らかにすること、第2の課題は「サッカラ村の市街化地の状況と住宅や暮らしの実態」を明らかにすること、第3の課題は、「サッカラ村の今後の観光化の可能性」を探るための景観要素を抽出することである。2012年夏の調査では、これらの補足調査として、サッカラ村のエジプトの集落としての特徴を確認するために、①村の大地主である元村長へのヒアリング、②村のコミュニティスペース（広場）調査を行った。

2015年度は、サッカラ村居住者に対し、アンケート調査を実施した。調査内容は、①住まいと暮らし、②遺跡への認識、③サッカラ村の現状認識と将来の3点である。これらは、第2の課題である「サッカラ村の住宅や暮らしの実態」を補完するとともに、第3の課題である「サッカラ村の今後の観光化の可能性」について居住者の考えを得ることを目的としている。本論文では、これらのデータを加えて、第2、第3の課題について考察を試みる。

2 調査の概要

アンケート調査は、2015年8月6日～12日に、サッカラ村で行った。アンケート票を用い、インタビュー形式で実施、161票の回答を得た。あらかじめ、調査対象者の年齢は20歳から60歳までとし、各年代の割合が2割前後となるように定めた。性別は、男女同数を目指した。実際の調査の方法は、サッカラ村の旧市街地、新市街地を移動しながら、路上など屋外にいる人々に、年齢と男女比が定められた割合になるように声をかけ、アンケートへの協力を依頼し、承諾のとれた人に対しインタビューを行った。

	専門職	販売業	農業	製造業	主婦	無職	運輸運 転	運搬清 掃	大学生	建設業	日雇い	サービ ス業	事務職	保安業	専門学 校生	総計	年齢構 成
20歳代	1	2	2	3		2	4		6	2	1	1		1		25	23.6%
30歳代	7	7	1	5			3	2		1	4	1				31	29.2%
40歳代	7	5	4	2		1	1			3	1	1	2	2		29	27.4%
50歳代以上	2	4	6	1		4		1				1	1	1		20	18.9%
男性 計	17	18	13	11		7	8	3	6	6	6	4	3	4		106	65.8%
男性構成比	16.0%	17.0%	12.3%	10.4%	0.0%	6.6%	7.5%	2.8%	5.7%	5.7%	5.7%	3.8%	2.8%	3.8%	0.0%	100.0%	
20歳代	4		1	6	3	2									2	18	32.7%
30歳代	4	1	3		1			1					1			11	20.0%
40歳代	4	3			5			3								15	27.3%
50歳代以上			3	1	6	1										11	20.0%
女性 計	12	4	7	7	15	3		4					1		2	55	34.2%
女性構成比	21.8%	7.3%	12.7%	12.7%	27.3%	5.5%	0.0%	7.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	0.0%	3.6%	100.0%	
総計	29	22	20	18	15	10	8	7	6	6	6	4	4	4	2	161	100%
総計構成比	18.0%	13.7%	12.4%	11.2%	9.3%	6.2%	5.0%	4.3%	3.7%	3.7%	3.7%	2.5%	2.5%	2.5%	1.2%	100.0%	

Table 1 回答者の属性：男女別年齢構成別の職業構成

回答者は、男性 106 人、女性 55 人で、構成比は男性 65.8%、女性 34.2%であった。女性の調査協力を得ることが難しく、ほぼ 2 : 1 の構成比となった。年齢構成は予定通り、各年代の割合がそれぞれ 2 割から 3 割であった。回答者全体での平均年齢は 38.3 歳、男性は 38.8 歳、女性は 37.5 歳であった。

男女別、年齢構成別、職業構成を Table 1 に示す。全体として、最も多い職業は、弁護士、会計士、学校教員など専門職が 18.0%、ついで青果や野菜、布、カーペット等の販売業が 13.7%、農業 12.4%となった。男性では販売業が最も多く、次いで専門職、農業、女性では主婦が最も多く 27.3%を占め、ついで専門職 21.8%、農業と工場勤務等の製造業が 12.7%と同割合となった。男性は運転手や建設業、保安業など様々な職業に従事していたが、女性は販売業、製造業、清掃業など、限られた職種であった。家に、1 世帯（夫婦が1組）で住んでいるのは 63.4%、2 世帯は 24.2%、3 世帯は 11.8%と、多世帯で住む家が 36.6%あった。家族人数は、7 人家族が最も多く、ついで 6 人家族、5 人家族となるが、平均世帯人数は 6.75 人であった。また、65 歳以上の高齢者が世帯にいる割合は 51.0%で、15 歳未満の子供のいる割合は、77.6%であった。子供の人数は 2 人が最も多かった。また、自動車を運転できる人がいない世帯が 68.3%であった。

3 サッカラ村での住まいと暮らし

(1) 市街地と居住者

サッカラ村での居住歴をたずねたところ、93.7%が「代々住んでいる」と答え、転入してきた人は 7 人（4.3%）であった。

Fig. 1 に示すように、サッカラ村の高台になっている環状道路の内側を旧市街地、その外側の市街地を新市街地とすると、住まいのある場所は旧市街地内が 57 人（35.4%）、新市街地が 104 人（64.6%）であった。旧市街地に住む回答者の平均年齢は 37.8 歳、新市街地に住む回答者の平均年齢は 38.6 歳と変わらず、年齢構成比も、ほとんど変わらなかった。

今の住宅での居住歴をたずねたところ、Fig. 2 に示すように、全体では 54.0%が 40 年未満であったが、新市街地では居住歴 30 年未満の回答者がおよそ 8 割であるのに対し、旧市街地では 6 割を切っている。実際の年齢には差がないにも関わらず、今住む住宅での居住年数に差がみられ、近年 30 年の間にサッカラ村の中で転居したことが分かる。



Fig. 1 サッカラ村の旧市街地と新市街地

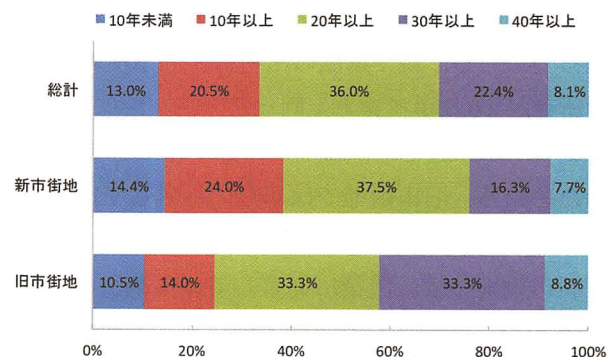


Fig. 2 市街地別回答者の居住年数

(2) 市街地と住宅

基盤整備の状況をアンケートの回答から確認する。旧市街地では、75.4%が家の前まで車が入らないと答えており、新市街地でも63.5%が同様に答えている。新市街地においても、法に沿った開発がなされず、スプロール的な市街地が広がっていることが分かる。

いずれの市街地でも、水道はあるものの、下水設備はない。水道設備はあるものの、98.8%の家で、浄水のための糞（ZEER）が使われていた。各家庭では水道水への信頼が低く、水道水を糞に保存して浄化して飲み水として利用していた。

旧市街地の住まいは、平屋10.5%、2階建て64.9%、3階建て24.6%と、2階建てが最も多くなっていた。一方、新市街地の住まいは、平屋28.8%、2階建て44.2%、3階建て25.0%、4階建て、5階建てはそれぞれ1人ずつで1.0%となり、むしろ新市街地の方が平屋建ての割合が18.3ポイントも高くなっていた。これは、旧市街地の建物密度の高さを示すものと考えられるが、新市街地の住宅が、上部への増築の可能性を残した新しい住宅となっている場合もあると考えられる。

Fig. 3に示すように、旧市街地と新市街地の住宅の建設時期を比較すると、新市街地では65.4%が築年数40年未満で、築年数20年未満も27.3%あるが、旧市街地では59.6%が築年数60年以上となっており、旧市街地にはまだまだ多くの古い建物が残っていることが分かった。

住宅の所有や、建設にあたりお金を出した人をたずねたところ、自身の所有が24.2%、親や家族の所有が68.9%で、借りている人は6.8%にすぎなかった。また、住宅の所有を旧市街地と新市街地で比較すると、自分の所有は旧市街地15.8%、新市街地で28.8%と、自身での所有の割合は新市街地で13ポイント高くなっているのに対し、親や家族の所有は、旧市街地で80.7%、新市街地で62.5%となり、旧市街地での親や親戚の所有が16.8ポイント上回った。

エジプトの家庭では、自宅の内部や屋上等で鶏等の家畜を飼う事が多い。家畜を飼っているかどうかをたずねたところ、旧市街地では農業に従事している割合が10.5%で牛や水牛等の家畜を飼っており、農業をしていないが家畜を飼っている割合が38.6%と高くなっていた。家畜を飼っていない家庭は5割であった。一方新市街地では、農業に従事している割合は、旧市街地より高く、13.5%であるが、農業に従事せず家畜を飼っている割合は25.0%と低くなっており、家畜を飼わない割合も6割となっていた。

サッカー村に農地を持っているかどうかを聞いたところ、26.1%が農地を持っていると答えていた。職業を農業だと回答した人が12.4%、農業をしており家畜を飼っていると答えた人も同じく12.4%であるので、農地を持っているが、農業をしていない人は13.5%おり、農地を持っている人の半数が、自身では農業をしていないことがわかった。

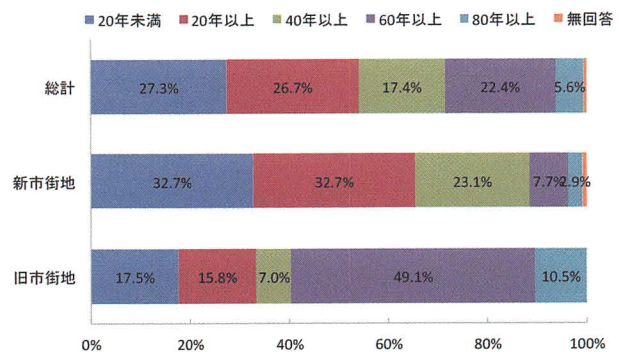


Fig. 3 市街地別住宅の築年数

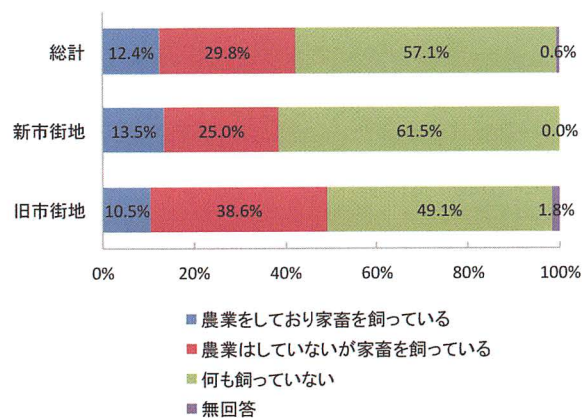


Fig. 4 市街地別回答者の農業従事と家畜飼育

（3）遺跡との関係

サッカラ村では、小学校の遠足等で遺跡に行くことがあると聞いている。今回は、大人になってから、改めてサッカラ遺跡に行ったことがあるかどうかをたずねた。「よく行く」と答えたのは13.0%で、この中には、遺跡のトイレ等の清掃や、遺跡の警備を仕事として行っている人が含まれる。「年に数回は行く」は10.6%、「ほとんど行かない」は9.9%、「行ったことは無い」は66.5%となった。

仕事とは関係なく、「よく行く」、「年に数回は行く」と答えた割合が高い職業は、大学生（6人中6人）と、専門職（29人中14人）で、「行ったことがない」と答えた割合が高い職業は、運輸運転業（8人中7人）、主婦（15人中15人）、専門学校生（2人中2人）、日雇い労働（6人中6人）、農業（20人中18人）となった。ここでいう専門職は、弁護士、会計士、教員を指し、大学生、大学卒業程度の学歴を持つ人と、そうでない人とで遺跡への接し方が大きく異なっていることが分かる。

サッカラ遺跡博物館があることを知っているかどうかをたずねた。「知っている」と答えたのは23.6%であった。専門職等（専門職と大学生）の職業の回答者では、57.1%が知っていたが、専門職等以外の職業では、14.3%であった。

ギザの遺跡群を訪れた経験をたずねたところ、全体では76.4%が「行ったことがない」と答えており、専門職等以外の職業の人では86.5%が「行ったことがない」と答えた。一方、専門職等の職業の人は57.1%が「よく行っている」と答えていたが、「行ったことがない」も40.0%いた。

「あなたにとって、サッカラ遺跡はどのようなものか」とたずねた。職業を問わず、8割近くが観光資源として大切だと思っており、エジプト人あるいはサッカラ村として誇りに思うとの回答は2割強であった。専門職等の職業の人は、サッカラ村というより、エジプトにとって大切だと考えている事が分かった（Fig. 5）。

（4）サッカラ村について

サッカラ村に外国人観光客が来ることについて、どのように思うかをたずねたところ、全体としては、「遺跡を観光するだけにしてほしい」「遺跡周辺で飲食・宿泊したり、土産物を買うのはよいが、村には入ってほしくない」といった、現状のままを保持する意見は、15.5%、51.6%と大多数を占めたが、「村の中で、飲食したり、土産物を買ってほしい」、「村の中で、宿泊してほしい」といった村に外国人観光客を受け入れたいとした意見は、25.5%、5.6%であった。

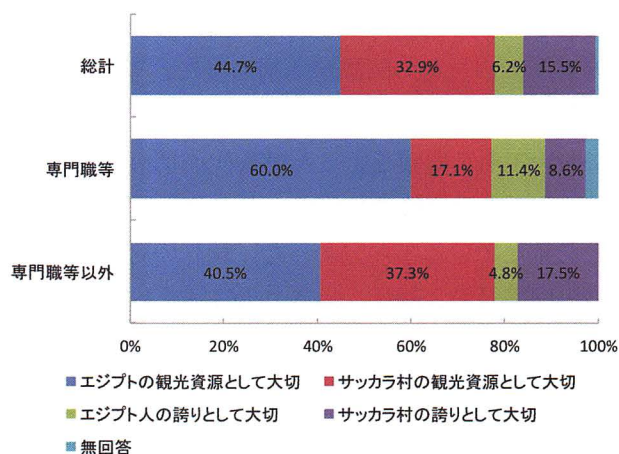


Fig. 5 職業別サッカラ遺跡への意識

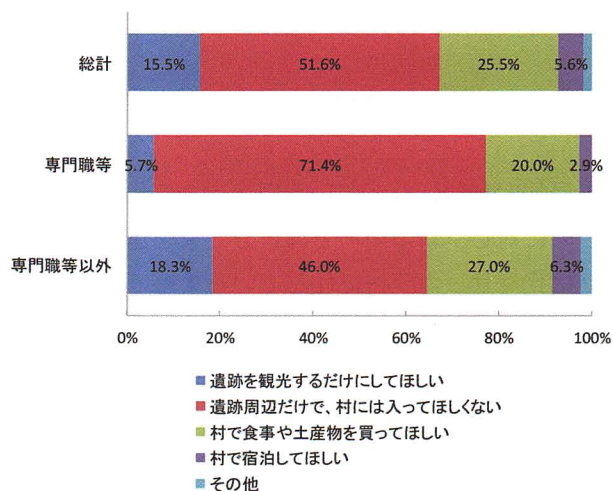


Fig. 6 職業別サッカラ村に外国人観光客が来る事に対する意見

職業による考え方の違いを見たところ、専門職等学歴の高い回答者の71.4%が、現状維持の「遺跡周辺で飲食・宿泊したり、土産物を買うのはよいが、村には入ってほしくない」との意見を示していた。一方、専門職以外の回答者では、「遺跡を観光するだけにしてほしい」との回答が専門職等より12.6ポイント高いものの、「村の中で、飲食したり、土産物を買ってほしい」、「村の中で、宿泊してほしい」との意見を合わせると10.4ポイント高いことから、専門職等の回答者の方がむしろ保守的な考えを持っている割合が高いことが分かった。

サッカー村の近年の変化について、「古い家に住む人が少なくなっている」「旧市街地には高齢者や低所得者が多い」「旧市街地には空き家が多くなっている」「外からサッカー村に来る人が増えている」「農業をする人が減っている」の5つの変化の中から、最もそう思うことを1つ選んでもらった。全体として、「農業をする人が減っている」と「旧市街地には高齢者や低所得者が多い」との認識が4割前後に共通してあった。特に、「農業をする人が減っている」については、専門職等の職業の回答者の6割がそうだと思うと答えており、問題意識を持っていることが分かる。自由記入においても、農業をする人が減り、「サッカー村の美しい景色が失われていく」との意見もみられた。

サッカー村の今後についての考えをたずねたところ、全体としては6割が、カイロのベッドタウンとなることを望んでいる事が分かった。観光の村であってほしいと答えたのは14.3%にすぎなかった。専門職等以外の回答者の3割が、農業中心の村であってほしいと考えているのに対し、専門職等の回答者は農業中心の村と考える回答者はわずか2.9%であった。

「サッカー村が好きですか」との質問については、90.1%が好きと答えた。アンケート形式をとっていたが、実際はインタビューしたので、肯定的な回答が多かったと考えられる。また、今後の居留意向についても、95.0%がずっと住み続けたいと答えた。

4 まとめと考察

本調査で明らかになったことをまとめる。

- ①島状の高台になっている旧市街地では、親の家に住んでいる世帯や60年以上居住している世帯が多いのに対し、新市街地では自分で家を建てた人が多く、居住歴も比較的短い。サッカー村の居住者の多くは代々サッカー村に住んでいる人々で、旧市街地も、その周辺の新市街地も住んでいる人の年齢層はあまり変わらなかった。
- ②旧市街地も新市街地も、下水の整備は未だ出来ておらず、水道はあるものの水質が信頼されていないためか、甕を用いて浄水している家庭がほとんどである。いずれの家も接道状況が悪く、車が入ることのできない道に面する家に住む割合が、新市街地でも6割強、旧市街地では8割近くに達している。新市街地も、都市基盤は未整備であることが分かった。
- ③農業に従事する人の割合は12.4%であったが、農地を持っていると答えた人は、26.1%で、農業離れが進んでいると考えられる。サッカーの村の近年の変化として、回答者の4割が「農業をする人が減っ

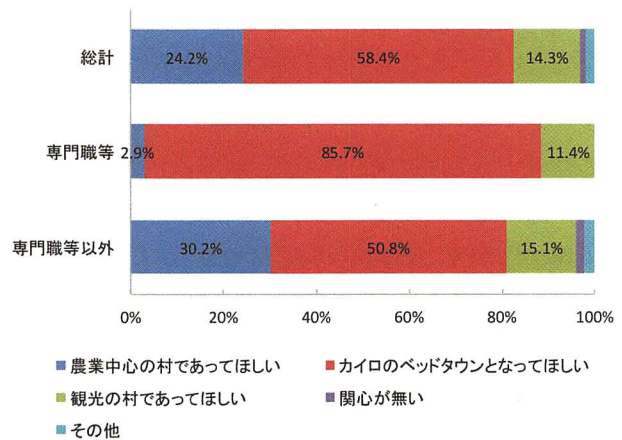


Fig. 7 職業別サッカー村の将来についての考え

ている」と答えていることから、この傾向が見られると言ってよい。農業はしていないが、鶏等を飼う家庭は多く、およそ半数を占めており、この傾向は旧市街地でより強く見られた。

- ④回答者の66.2%が、大人になってからはサッカラ遺跡に行ったことがないと答えており、サッカラ遺跡博物館があることを知っている人も23.6%と少なかった。しかし、専門職に従事する高学歴の人々は、半数以上が知っていると答えていた。8割近い人々が、サッカラ遺跡を観光資源として大切だと答えているが、専門職従事者や大学生は、サッカラ遺跡をエジプトの観光資源と捉えているのに対し、それ以外の人々はサッカラ村の観光資源と答える割合が高くなっていた。
- ⑤ギザの遺跡群には、回答者の76.4%が行ったことがないと答えており、専門職以外の人々は特に、9割近くが行ったことがないと答えた。遺跡群はあくまでも外国人向けの観光資源であり、ギザの遺跡群も国内の観光地とは捉えられていないことが分かった。
- ⑥サッカラ村に外国人観光客が来ることについては、遺跡周辺の土産物屋には来てほしいが、村には入ってほしくないという意見が半数を占め、特に専門職従事者や大学生にこの傾向が強く見られた。これは、サッカラ村が十分に整備されていないために、外国人を受け入れるにはまだまだ不十分だという考えの現れであると考えられる。
- ⑦サッカラ村の近年の変化としては、「農業をする人が減っている」と、「旧市街地には高齢者や低所得者が多い」の2点が特に強く認識されており、旧市街地が抱える問題点も認識されていることがわかった。
- ⑧サッカラ村の将来については、「観光の村であって欲しい」とする回答より、「カイロのベッドタウンとなって欲しい」との考えが支持されており、6割近くがそのように答えている。サッカラ村が、比較的カイロと近いこともあるが、観光資源としての村や、村の資源としてのサッカラ遺跡という認識が乏しいと考えられる。サッカラ遺跡に限らず、ギザの遺跡も含めエジプトの古代遺跡は、エジプト人にとっては民族の誇りではなく、外国人向けの観光資源だという考え方が大多数を占めていた。

サッカラ遺跡は、エジプトが世界に誇る遺跡群であるが、その遺跡に隣接するサッカラ村は、下水道設備も世界レベルとは程遠く未整備であり、そのことを知っている高学歴の人々は、村に外国人が入ることを拒むこととなっている。

村の人々とサッカラ遺跡とは、外国人観光客への土産物の販売、サッカラ遺跡の施設の清掃、遺跡発掘等の労働力といった接点しかなかった。サッカラ遺跡を自分たちの村の誇りと感じ、貴重な観光資源として活用する等、居住者側から働きかける対象とはなっていなかった。このことは、ギザの遺跡を訪れたことがある人が少ないという、古代遺跡への関心の低さとなって現れている。この事実はそれぞれの国の国民性や教育、宗教によるものであり、私たちは前提条件として受け入れなければならない。

サッカラ村の人々は、サッカラ村が、観光客として外国人を受け入れて観光地として発展することより、カイロから転入するエジプト人を受け入れてベッドタウンとして発展することを望んでいる。しかし、その住宅地をどこに造るのか。さらに農地をつぶして、これまで通りのスプロール市街地を増やしても、それはカイロの人々のニーズに合ったベッドタウンではない。あるいは、サッカラ村とは離れた場所にニュータウンを造るとしても、サッカラ村の道路や下水道などの都市基盤整備とは関係なく進められ、サッカラ村は何ら恩恵を受けることはないに違いない。サッカラ村の人々の、「サッカラ村をカイロのベッドタウンにしたい」という思いは現実的ではない。サッカラ村の旧市街地や市街地の周りに広がる田園的風景が無くなっていくことを残念だとする声が、今回のアンケート調査の数名の自由記述にみられたが、大多数のサッカラ村の人々には、これらの魅力が認識されていないことが課題である。サッカラ村の景観的魅力の数々は、私たちが外からの声として、サッカラ村の人々に伝える必要があると考える。

若い人たちの仕事がサッカー村に無いとする指摘も、自由記述にみられた。サッカー遺跡の観光資源としての活用と、サッカー遺跡から望む村の田園風景、サッカー村の市街地景観の再発見を行うことにより、遺跡だけをみてカイロに戻る観光のあり方を、村を眺める、村の農作物を食べる、といったさまざまな形で、村や村の居住者との関わりをつくりだすことにより、新しい雇用を生み出し、サッカー遺跡観光を厚みのある観光へと変えていくことができると考える。そして、観光客が村に立ち寄るようになることも、実現に近づくに違いない。その結果として、村の都市基盤整備が行われることが望まれる。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 25 年度～平成 29 年度）」によって行われた。